柳沢秀雄君

作曲

明治四十四年寮歌

憧憬彩と流れては
あこがれるや なが 万朶一朶の朝霞 薬岩の緑春闌けて かどりはる た

若き血潮の踊る時 花皆奇しき香ならずや

希き 望ら 一の前途 光 あり

青葉波よるアカシヤのタッ゚ぱなみ

斗をなんの

ジ翼拡げては

長風夏の雲ゆらぎ

雲より高きアンデスの 天地広しと誰か云ふ

牛の背に散る蔦紅葉 鐘声止みて今暫ししょうせいやいましば 秋は牧場の夕まぐれゅきょきょ 薫る木影に立ちよれば

天ん に 裾野に友よ羊逐へすその とも ひつじゅ

岸辺の森に斧を振れ 漲るアマゾンの

あは おほし立つ可き人皆の 自然を己が揺籃に ħ 美の国記 石いかか の

いちげきばん り 意気紅霓に似たるかない きこうげい 撃万里す大鵬の

翼整装ふ思あり

巨人の叫び茲にあり 世の濁流を叱咜して

声すさまじく吹雪く時 八荒裂けて万籟のはっくわうさ 樹林の暗の深き時 弦月落ちて白楊のげんげつお

騎奢の波は狂ふとも はないくる 浮華軽佻の風あれて

正気溢るる意気の歌りをした。 世は永久に我世なり 北斗の光清ければ